熊本県立熊本西高校

外部連携、校務改革

大学・専門学校と連携した独自の体験授業で、生徒の進路・学習意識を向上

変革のステップ

背景と課題

- 進路意識が希薄で、学習意欲が低い生徒の増加
- 業務過多によって、教師が生徒と向き合う時間が少なくなっていた

実践内容

- **外部連携**　県内の私立大学や専門学校と連携し、同校の生徒向けの授業を受講する「西高アカデミックインターンシップ（NAIS（ナイス））」を、1年次に実施。また、一般社団法人・大学と包括連携協定を締結。大学の最先端施設の利用や、大学・企業が開催する講座への無料参加などができるようにした
- **校務改革・働き方改革**　教師の負担軽減を図るため、朝課外を希望制にし、発展的な内容に変更。全校務を一覧化して見直し、非効率な業務を削減

成果と展望

- 事前指導や振り返りを徹底し、NAISの効果を高めることで、生徒の進路意識や学習意欲が向上
- 教材研究のための時間を増やすことができるとともに、生徒との面談期間も設置

1年生全員が大学・専門学校に5日間通い、授業・実習を体験

熊本県立熊本西高校では、地域の外部機関と連携し、生徒の意識改革、教師の指導改革を推進している。2019年度には、1年生が県内の大学や専門学校の授業・実習を5日間にわたって体験する「西高アカデミックインターンシップ」（以下、NAIS（ナイス））を始めた。18年度に着任した柿下耕一校長は、同校の課題を次のように捉えたと語る。

「本校は、高校入試で低倍率の状況が続いていました。本校の以前の様子を知る教師は、現在の生徒の進路意識の希薄さや学習意欲の低さに驚いていました。そこで、1年次の早

PROFILE

「清・明・和」の校訓の下、知・徳・体の調和の取れた教育を通じて、世界的視野に立った人材育成を目指す。普通科体育コースの生徒を中心に部活動も活発で、野球、ラグビー、なぎなた、柔道、剣道、陸上、水泳などの部が活躍。

設立	1974（昭和49）年
形態	全日制／普通科・普通科体育コース・理数科（＊）／共学
生徒数	1学年約360人
2019年度進路実績（現役のみ）	国公立大は、高知大、佐賀大、長崎大、熊本大、宮崎大、北九州市立大、熊本県立大などに25人が合格。私立大は、専修大、法政大、福岡大などに延べ236人が合格。短大、専門学校進学105人。就職26人。
住所	〒860-0067　熊本市西区城山大塘5-5-15
電話	096-329-3711
Web site	https://sh.higo.ed.jp/kumanishi/

＊ 2020年度、理数科はサイエンス情報科に改組。

い段階で高校での学びと大学・社会とのつながりを実感させて、それを自身の将来について考えるきっかけとし、目的意識を持って高校生活を送れるようにすることを目指した取り組みを考えました」

そうして始められた取り組みが、NAISだ。18年度は、3大学の協力を得て、1年生から希望者を募り、7月と10月の2回、実施した。だが、参加を希望しなかった生徒にこそ視野を広げる機会を与えたいと考え、19年度は、1年生全員が参加できる体制を目指して、進路指導主事の森山幹俊（みきとし）先生を中心に近隣の教育機関と交渉を続けた。その結果、県内の私立大学6校、資格取得・医療系の専門学校2校と連携し、8～9月、1年生全員が参加する体験授業が実現した（図1）。

校長
柿下耕一 かきした・こういち
教職歴33年。同校に赴任して2年目。『生徒を変える』『教師を変える』『学校を変える』を常に考えて行動する」

進路指導主事
森山幹俊 もりやま・みきとし
教職歴31年。同校に赴任して12年目。「生徒が有形無形に敏感に反応し、適切な行動ができるよう支援したい」

1学年主任
錦戸真介 にしきど・しんすけ
教職歴23年。同校に赴任して8年目。『教育に終わりはない』という信念の下、もう一歩、もう一歩先へと生徒を導きたい」

進路指導部・1学年担任
森田まゆみ もりた・まゆみ
教職歴8年。同校に赴任して1年目。「生徒の持つ無限の可能性を引き出すために挑戦し続ける教師でありたい」

進路指導部
打越敬洋 うちごし・たかひろ
教職初年度。同校に赴任して1年目。「謙虚に学ぶ姿勢を常に忘れず、生徒一人ひとりのよき手本となるような人でありたい」

生徒はまず、体験先を大学と専門学校のどちらかから選ぶ。大学の場合は、複数の大学に5日間連続で通い、大学での学びについて説明を受け、施設を見学した後、授業・実習を受講する。専門学校の場合は、同じ学校に5日間連続で通い、医療や介護、理学療法などの授業を受講する。いずれも、同校の生徒向けに企画された授業・実習だ。

大学からの指摘を受けて、生徒への事前指導を強化

1年生全員参加の実現には、同校の粘り強い交渉があった。

「最初は、大学教員に直接連絡し、体験授業の実施を交渉しましたが、高大連携に理解が得られない場合もありました。そこで、各大学の入試課や広報課に相談したところ、『地域の明日を担う生徒の育成に協力したい。授業を受けた生徒が本学を志願しなかったとしても、高校との連携は重要』と、大学内の調整に積極的に動いてくれました」（森山先生）

1大学につき1学年団の教師1～2人が担当者となり、各大学との打ち合わせを綿密に行った。そして、授業当日は、各大学に教師も同行し、必要に応じて指導するなど、大学教員に大きな負担が生じないように留意した。実は、18年度にNAISに協力してくれた大学から、「不真面目な生徒がいたが、引率の教師は注意もしなかった。生徒も教師もやる気があるのか」といった厳しい指摘を受けていた。

「引率した教師には、『大学の授業の場で、高校の教師が口を出すべきではない』といった考えがあったのだと思いますが、高校側の指導が至らず、大学側にご迷惑をおかけしてしまったことは恥ずかしい限りでした。その反省を踏まえて、19年度は事前指導を丁寧に行いました。その結果、すべての大学から『生徒が真剣な姿勢だったので、授業がやりやすかった』など、評価の声をいただけました（P.40写真）」（森山先生）

事前指導では、生徒に企画の意義を繰り返し

図1 「西高アカデミックインターンシップ」概要

◎目的
大学・専門学校での授業・実習体験を通して、高校の学習活動に対する興味・関心を高めるとともに、将来の職業との関係を学ぶ。また、職業を意識した具体的な進路目標を定める一助とする。

◎協力大学・専門学校
九州看護福祉大学、熊本学園大学、熊本保健科学大学、尚絅（しょうけい）大学、崇城（そうじょう）大学、東海大学、大原学園、九州中央リハビリテーション学院

◎事後指導
毎日の終わりには、ポートフォリオの一環として日報を記入し、学びの理解を深められるようにした。

＊上記は2019年度の内容。学校資料を基に編集部で作成。

伝えたと、進路指導部の打越敬洋先生は語る。

「今回の授業は、本校の生徒のためだけに行われます。各大学が自分たちのために一生懸命準備してくれたことを生徒が理解し、感謝の気持ちを持って臨めるようにしました」

事後指導も徹底した。生徒は、毎日の授業後に授業内容や感想、学んだことを、リフレクションシートにまとめた。そして、教師4人が分担して、同シートをその日のうちに添削し、「授業内容をもっと具体的に書こう」「メモを反映させよう」といったアドバイスを添えて翌日に返却。最終的には、添削内容を基に生徒が修正したシートを、当該大学に提出した。1学年担任の森田まゆみ先生は、生徒の変化を次のように感じたと言う。

「初日は、校舎の感想など、授業と関係のないことを書く生徒もいましたが、日を重ねるうちに内容が具体的になり、最後は誤字を訂正するだけでよいレベルにまで、多くの生徒が達しました。1日に30～40人分のリフレクションシートを添削するのは大変でしたが、わずか5日間でも、生徒が大きく成長していく姿を目のあたりにすることができ、喜びとやりがいを感じました」

写真　崇城大学工学部ナノサイエンス学科での授業。大学の設備を借りて実験を行った。生徒が関心を持てるように、企画において教師は大学側と綿密な打ち合わせを行った。

NAISの運営が教師の指導力向上にもつながる

生徒のNAISへの評価は高い。19年度の事後アンケート（5段階評価）では、授業満足度が平均4・25、授業に臨む態度の自己評価は平均4・28だった。1学年主任の錦戸真介先生は、次のように語る。

「自由記述欄には、『自分の学習量は足りないと実感した』など、自身の学習を振り返るコメントもありました。そうした生徒の意欲の高まりを実際の学習行動に結びつけられるかどうかは、教師の指導力にかかってきます。上級学校での学びや社会に対する生徒の関心の高まりを、私たちがさらに高められるよう、日々の授業を工夫するなどしていきたいと考えています」

生徒の日常生活にも変化が見られる。学年集会などでの参加態度が落ち着き、2学期の終業式では、教師が生徒を注意する場面がほとんどなかった。

「1年次半ばという早い段階に、多くの教育機関の協力で実現した校外の体験学習を経たことで、周囲を見て行動できる力が身についてきていると感じています。『進路実現のために必要なことが分かった』『（受けた授業は）希望分野ではなかったが、興味が湧いた』といった声もあり、視野を広げ、進路意識を高めている様子も見て取れます」（打越先生）

NAISは、教師の視野を広げる機会にもなった。1学年団の教師全員が連携先を受け持ち、各大学と話し合いながら当日のプログラムを構築。生徒への事前指導も徹底し、NAISにかかわる全員が当事者認識を持って当日に臨んだ。学外の機関とのかかわりは得がたい経験だったと、錦戸先生は振り返る。

「当初、私は取り組みの意義を十分理解できていませんでしたが、プログラムを構築していく過程で、地域の大学・専門学校を巻き込んだ大きなプロジェクトであると実感しました。何より、生徒の生き生きとした表情や、授業後のしっかりした内容の感想を見て、NAISを実施してよかったと思いました」

学年団の雰囲気が明るくなったのも、大きな成果だと森山先生は言う。

「大きな取り組みを成功させたことで、教師は指導に自信を持ち、生徒をさらに伸ばしたいという意欲を高めていると感じます。学習指導も含めて、学年団が一丸となり、同じベクトルで熱心な指導ができています」

すべての校務を洗い出し、指導や学校行事などを精選

同校では、大胆な校務改革も推進中だ。柿下校長は、18年度の赴任直後に2日間かけて、すべての主任・主事十数人と面談した。そこでの話で感じたのは、教師の負担感の大きさだった。

「先生方に校務や指導の状況を聞いてみたところ、担任や副担任をしながらの分掌業務や学校行事、会議に忙殺され、生徒と向き合う時間の確保を求めていることが分かりました。丁寧な指導が必要な生徒も増えています。どの生徒に対しても、それぞれに合った指導を充実させるためには、教育効果の期待が薄く、ねらいに見合わない取り組みを見直す必要があると考えました」（柿下校長）

柿下校長は、全教師にアンケートを行い、教師にかかる負担の割に教育効果の低い取り組みを明らかにし、年度途中ではあったが、校務改革に踏み切った。大きな変更については、保護者にも丁寧に背景を説明し、実行した。その一例は、朝課外だ。それまでは全員参加で、復習中心の補習を行っていた。しかし、教材研究の時間が減少し、授業で学力を向上させられていないと感じている教師が多かった。そこで、7月から運営委員会や職員会議で検討を重ねた結果、10月から、朝課外にかかわる教師を少なくするために希望制とし、予習が必要な発展的な内容に切り換えた。

一方で、必要性が認められた取り組みは、新たに追加した。2学期からは面談週間を学期に1回設定し、生徒との対話を促進した。部活動が盛んな同校では、放課後は練習に時間が取られていた。しかし、生徒指導の充実のためには定期的な面談が不可欠だとし、その時間を確保した。

また、「校務棚卸表」（図2）を用いて、校務分掌・学校行事を見直した。18年度2学期に、すべての分掌の業務内容とそれにかかる時間の一覧表を作成。柿下校長が査定、助言をしながら、業務の20％削減を目標とした改革案をつくり、19年度から実施した。その結果、重複する業務を清算し、かけ持ちをなくした1人1分掌体制となり、教師の大幅な負担軽減が実現した。

図2　「校務棚卸表」（抜粋）

分掌区分					業務量					年間業務量
No.	分掌名	小分掌名	時期	業務内容	1回あたりの時間	頻度 日	週	月	年	
1	総務全般	新年度の準備	4月上旬	職員会議の資料作成等	5				1	5
				入学式要項作成	10				1	10
			4月4日	新転入者オリエンテーション	2				1	2
			4月4日	入学式パンフレット作成	3				1	3
			4月3日	職員室座席表作成	3				1	3
			4月6日	レターケース、棚名前張り替え	2				1	2
		卒業式	4月6日	卒業式実施要項作成	10				1	10
			2月22日	卒業式案内作成・配付	3				1	3
		入学式	1月17日	入学式案内状作成・配付	2				1	2
			3月8日	入学式配布物の袋詰め	2				1	2
		総務部会		部会資料作成	0.5		1			24
			通年							
2	式典	始業式・終業式		司会	1.5				6	9
		司会準備		進行表・原稿作成	1				6	6
		卒業式	3月	司会	2				1	2
		予行・会場設営	2月	司会・設営	8				1	8
		司会準備	2月	進行表・原稿作成	2				5	10

「校務棚卸表」は、①業務の見える化と総量把握、②業務・事業の20％程度の削減、③学校行事の20％程度の削減、④学年会や分掌会の回数減など、7つの視点で、各分掌で作成。すべての分掌で業務を見える化し、校務改革に取り組んだ。

＊学校資料を抜粋して掲載。

Society 5.0を生き抜く地域人材の育成を図る

19年12月には、地域創生を推進する一般社団法人SCBラボ、人工知能の研究等にも力を入れる崇城大学と包括連携協定を締結。生徒が、両者が開催する講演や講座に無料で参加したり、大学所有の最先端施設を利用したりすることができるようにした。19年末には、理数科や普通科特進クラスの生徒が、ドローンのプログラミングや地域の防災マップづくりを行う講座を受講した。柿下校長は、展望をこう語る。

「卒業生の大半が県内に残る本校は、これまでも地域とのつながりを大切にしてきました。包括連携協定は、SCBラボや崇城大学と『Society 5.0を生き抜く地域人材の育成』という課題意識が合致し、実現したものです。どの地域もそうだと思いますが、本県でも地域人材の育成が急務です。協定を最大限に活用して、生徒の視野を広げ、地域の活性化に貢献できる人材を育てていきます」

今後の課題は、2年次での企業インターンシップの実現だ。全員参加を目指し、企業や熊本県教育委員会と調整中だ。さらに、SSHに申請し、探究学習の実施も計画している。短期的には探究学習の成果を推薦・AO入試に生かして進学実績を向上させつつ、地域社会で活躍するための資質・能力を育んでいく考えだ。